



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
©1983 精道教育促進協会 (芦屋)三二・三四五二 芦屋市船戸町12-6

教皇様の叢

教会の母マリア

マリアは教会の母です。なぜなら、永遠の父の得もいえない選びにより、愛の聖霊の特別の働きの下に(『教会憲章』56)、人間の生命を神のみ子に与え、この方のため、またこの方によって万物は存在し(ヘブライ2・10)、またこの方から神の民全体が選びの恩寵と尊厳を受けたからです。マリアの本来の御子は、特に愛しておられた弟子を十字架の上からマリアに子として示されたとき(ヨハネ19・26参照)——すべての魂と心にたやすく分かるような形で——ご自分の母の母性を広げることとを望まれました。私たちの主の昇天の後、教会があたかも暗がりから明るみに出たように目に見える形で生まれた聖霊降臨の日まで、聖霊は、マリアが使徒たちとともに祈りに専念しながら、広間にとどまって待つようにマリアに示唆を与えました。(使徒行録1・14と2参照) 以来弟子たちと公にキリストを信じかつ愛するものすべての世代は——使徒ヨハネがしたように——この母を霊的に自分の家にひきとりました。(ヨハネ19・27参照)そしてこの母は、初めから、つまり「お告げ」の瞬間から、救いの歴史と教会の使命の中に

組み入れられました。それで今日キリストの弟子の世代を形成する私たちは皆、特別にマリアに結ばれることを望んでいます。私たちは古い伝統を堅く守り、同時にすべてのキリスト教共同体の成員に対する心からの尊敬と愛をもって、そのようにします。私たちは信仰と希望と愛の深い必要にせまられて、そうするのです。実際、教会の、また人類の歴史のこのような困難で責任の重いかつ人間の主であるキリストにたよることの特別な必要を感じても、私たちがこの秘義の神めかつ人間的な面に導き入れることのできるものはマリアのほかに誰もいないと信じています。神ご自身からこの秘義に導き入れられたものは、マリアのほかに誰もいません。ここに神の母性の独自性があります。この母性の尊厳が人類の歴史において独自の一度限りのものであるだけでなく、贖いの秘義による神の人間救済の計画へのマリアの、その母性による参加も——その深さと広さにおいて——独自のものです。この秘義そのものは——こう言えるなら——

ナザレの聖なるおとめが、あの「なりますように」と言ったときに、その心の底に形をとりました。それ以来、マリアのおとめで同時に母の心は、聖霊の特別の力の働きによって、常に御子の業に従い、キリストがその尽きない愛をもって、すでに受け入れ、また絶えず受け入れていくすべてのものに近づきます。それでマリアの心も同じように尽きない母の愛情をそなえているはずですが。しかし神の母が贖いの秘義と教会の生活に注ぐ母の愛の特徴は、マリアが人間とそのすべての出来事のそば近くにいる事実を示されています。マリアの秘義はここにあります。特別の愛と希望をもってマリアを見つめる教会は、その秘義をますます深く理解したいと願っています。教会は、そこに自分の日々の生活の道、つまりひとりひとりの人間も認めるからです。父の永遠の愛は、「み子信じるものが死な

ないで、永遠の生命をうるよう」(ヨハネ3・16)、父が下さったみ子を通して人間の歴史に現われましたが、この愛は、この母を通して私たちひとりひとりに近づき、こうしておの人間に分かり易く、また近づきやすいしるしをえました。したがって、マリアは教会の日々の生活のすべての道に見いだされねばなりません。マリアが母として現存しているから、教会は、自分が師かつ主の生活を真に生き、また十全な生命を与える贖いの秘義に生きていくという確信をもっていきます。同じように、現代の全人類の多くの、さまざまな生活分野に根をおろしているような教会は、自分が人間、つまり個々の人間と結ばれており、自分がこの人間の教会、すなわち神の民の教会であることを信じ、いわば体験しています。(里脇浅次郎枢機卿訳、中央協議会発行『人類の贖い主』22)

病に伏す方々へ



私のことばに耳をかたむけてくださるみなさんに、心からごあいさつ申し上げます。この前の日曜日には主の御体と御血を盛大に祝いました。主は我らと共にいます神、パンとぶどう酒の外観のもとに現存なさる神であります。その昔、パレスチナの道々を歩まれたイエズス、そのイエズスの優しくあわれみ深い聖心は、今もかわらず聖なるホスチアに、沈黙のうちにも雄弁この上ない仕方で見守り、大勢の人々、とくに、病に伏す人々や苦しんでいる人々に、ことばをかけてくださっています。「労苦する人、重荷を負う人は、すべて私のもとに来るがよい」(マテオ11・28)この招きをお心で受け入れてください。みなさんに祝福を送ります。(一九七九・六・二〇)

病に伏すみなさん、いつものあいさつをみなさんに送ります。イエズスの聖心にささげられた六月を迎えるにあたり、ぜひみなさんにお勧めしたいことがあります。みなさんの心と希望と祈りを「かくも人間を愛してください」、今も神として人間としての心で愛しつづけてくださっているイエズスの聖心にささげてください。聖心は大きな困難や苦しみを受け、涙を流す人びととくに愛してください。 「優しく愛にあふれた」キリストの聖心のなかに、苦しみにたえる力とたくさめ、精神の平和、苦しみを一つひとつの功徳をみつけることができるからです。(一九七九・六・十三)

召し出しが生まれる家庭

キリスト信者の両親は、信仰と勇気をもって、人間の生命の本質的価値を尊ぶよう子供たちを教育していかねばなりません。

性の尊さ

みなさんが寄り所とする結婚観や家庭観は、キリストがお与えになる光のもとで考えなければなりません。つまり、生き生きとした信仰のみのりとしての結婚観であり、家庭観であるべきです。「信仰によってアブラハムは、召された時、遺産として受けるであろう地に行け」という命令に従い、その行く方向も知らずに出かけた。(ヘブライ11・8) あの日アブラハムが受けた神の命令は、私たちに向けられた命令でもあります。洗礼を受けた私たちは、神の約束の「共同相続人」になるように招かれています。私たちの生涯を、「約束された土地、つまり、神の御手によって設計され建造された永遠の町に向かう巡礼」と、考えるためです。

人生をこのように考えてみると、なぜ教会が絶え間なく人間の権利を宣言するのがわかります。人間の権利は神の権利に優先しないとは言え、そのなかで最高の地位を占めるのは生命に対する権利です。結婚した夫婦は生命の源を自分以外の人に伝えず、ただし、責任ある父、責任ある母でなければなりません。第二バチカン公会議で認証された規範や回勅「ファミリー・ウィテ」を思い起こし、前回の司教会議での司教の考えを要約した上で、私は最近の教皇訓戒「ファミリアリス・コンソルツィオ」のなかでいくつかの点に触れました。

その一つは、親がもつ重要な権利の中には、子供を産む権利と、その子供を立派に育て教育するのに必要なものを手に入れる権利がある

るということでした。それゆえ教会は、夫婦がもつ、子を産む自由や子供を教育する自由がみさかいたしに抑制されるのを黙ってみているわけにはゆかないのです。それは、人間の尊厳と正義に対するゆゆしい攻撃であるからです。また、現代の思潮に浸透しつつある傾向、つまり生命についての陰險な考え方を非難するのも、私の義務であると考えます。神はすべての人に言っておられます。「おまえの働きによって宿る生命を飲んで迎えよ」。神はこれを、掟と教会の声を通して伝えられます。神はまた、直接人間の良心に語りかけられます。反対を唱える「声」がおこり、沈黙をせまってくるのがあっても、耳を傾けぬわけにはいかなない神の声であります。夫婦の精神的肉体的な交わりは、つねに愛の光をうけていなければなりません。性とい

観想生活の卓越

乙女たちと殉教者

昔の栄えある聖人たちの後継ぎであるみなさんにお会いでき、ほんとうにうれしく思います。みなさんは初代教会の栄光に輝く教会の伝統を継ぐ方であります。シリリの教会は、初代から数多くのよく知られた乙女や殉教者にめぐまれています。そのなかにはミサ聖祭のローマ奉獻文に名を連ねる聖アガタや聖

うものに対して敬いの心をもたなければなりません。性を単なるモノあるいは対象と考えるわけにはいかならないのです。そんなことをすれば、心と体のパーソナルな一致はくずれ、「本性とペルソナが、互いに作用し合う」ところで、神の創造のみ業を拒否することになります。家庭の中で生まれるべき人間の命を生み出す仕事は神のみ前で実に偉大なことなのです。

召しだしは家庭から

父なる神は、親を創造のみわざに協力させ、人類の子孫への招きを繰り返されます。生まれる生命に向かって、「神の約束の相続人」になれ、イエズス・キリストにおいてすべての人に約束された「地」に向かって出発せよ、とおおせになるのです。

家庭は神の召しだしを受ける場です。キリスト信者である夫婦や親はこの責任を自覚し、とくにみずからの生きた見本を示して子供に信仰教育をほどこし、子供が神の召しだしをうけることができるだけ協力しなければなりません。

召しだしは、教会の救いの使命にとって特に大切で、それはキリスト信者の家庭、つまり、未来の司祭、修道士、宣教師、使徒たちにとってはゆりかごである家庭の中に生まれま

す。教育機構には難しさもありますが、キリスト信者の両親は、信仰と勇気をもって、人間の生命の本質的価値を尊ぶよう子供たちを教育していかねばなりません。家族の中に家庭教会を建てるべく、子供たちの中に偉大な教会を建てるよう望まれていることを忘れないでください。

ひよっとすれば、「神に召された」子供の手を通して偉大な教会を建てることになるかも知れません。もし神が子供たちを王国で仕えるために招かれたならば、みなさんは心おしみをせずに応じてください。神もみなさんに対してはこの上なく寛大であらせられたのです。(…)

(一九八二・五・十五)

家族への聖母の特別のご加護を願って多くの方が結婚の祝典にこの聖堂を選びました。その信仰がむくわれて、キリスト信者ががちりと安定した家庭を保てるよう祈ります。

修道者の召しだしには、

唯一無二の価値がある

何よりもみなさんにお勧めしたいことがあります。修道生活と奉獻についての正しく崇高な理想を守り、育んでくださいと申しあげたいのです。それも、今も昔も変わらぬ主の

説教・講話・書簡等の抄訳

仕事、神に捧げるもの

働くことで自分自身の人格を形成し、家族や社会を作りあげてゆく

教えに従って、そうして欲しいのです。たしかに、教会は修道生活の在俗の生き方をも奨励しています。正しい理解さえあれば、そのような生き方は神の民と全世界にとって大きな祝福です。第二バチカン公会議では、世俗的な価値と信徒の尊さが明らかにされました。しかし同時に、修道生活の唯一無二の価値を強調し、誤れる世俗主義にまけて、修道生活がゆがめられることがあってはならないと教えています。修道生活に入ることで、洗礼による奉獻を越えて完徳に達することができるといふ事実を忘れてはなりません。

修道者が信徒より一段高いレベルにいると、うぬぼれた思いにとりつかれるとか何とかい

うことではありません。聖トマス・アクィナスが教えるように、完徳の身分にいるからといって完全であるとは限らない(神学大全)からです。修道者は多くの恵みを受けているわけですから、かえってより一層多くのことが要求されます。修道者は、より謙遜であるはずですし、神への感謝の度合いもずっと上であるはずで、キリスト信者の義務を一層深く自覚し、より寛大に、愛徳を実行しなければなりません。「恵みを多く受けた人は多く要求され、多くをまかせられた人は多く要求される(ルカ12・48)からです。

修道生活が優越するといっても、それは、信者の究極目的はだれにでも共通で、聖性と

完徳によって得る至福のことです。そして、完徳の身分とはそれ自体、世俗の、あるいは結婚の身分に必要な、洗礼による奉獻より上位にあると言えます。しかし、修道者が、キリストと一層親密になりたいと思うならば、自分の手中にあるものも特別な手段を賢明に、辛抱よく用いなければなりません。

世の光、地の塩

みなさんも使徒たちと同じく、「世の光であり、地の塩」であります。(マテオ5・13-16参照) この世の希望なのです。みなさんがこの世にいること自体、苦々しく、偽善的な運命論を拒否していません。つまり、不正の数かずを克服することはできないと考え、暴力

や悪を行なう者に加担するようなことを断固として拒んでいることになるのです。不正を厳格に取りしまったり、不正にうちかつべく力を用いたりすることはみなさんの仕事ではありません。みなさんには、目立たないながらも、決してひけをとらない武器があります。祈りのことです。そして、堅忍して奉獻すること、責任を伴う従順、教育や愛徳に関わる仕事、清い生活、それに正直誠実なことばと永遠を希望する心にあふれるキリスト信者の忍耐も含まれます。これらは、「万世の王」(ティモテオ①1・17)であるキリスト、「王の中の王」(使徒行録17・14参照)である小羊、キリストの武器であると同時に主の御母マリアの武器でもあります。(パレルモのカテドラルで)

勤勉。まず、回勅を思いだしてください。「働くというは人間にとっていいこと、人間自身の人間性にとっていいこと、なぜなら働くことを通して人は天然自然を變革して自分の需要に適應させるだけでなく、人間として自分を充実させ、言ってみれば、もっと人間に」なるからです。ですから私たちはみな、仕事に従事しなければなりません。働くこと

のなかで素材は高められるが人間自身は自分の尊厳を失うのではないかというように思いますが、働かずに、働かずに人間に固有な尊厳と主体性、さらに品性を高めるよう心がけねばなりません。

仕事というものは、必要であるだけでなく、たとえ骨がおれ難儀をとまなっても、人間の地上の生存にとって基本的なことなのです。人間は仕事のなかで自己を主張します。仕

事のおかげで自分の弱さを経験するのはたしかですが、同時に、自分のもつ創造力をも知ることができるといふことです。みなさんも毎日のように、こう感じていらっしゃるでしょう。どうか、その力を忘れないでください。なるほど初めは物と戦わなければなりません。しかも、なかなか思い通りになってくれません。しかし、何年かの苦勞のあと、進水する船を目のあたりにして、満足感を味わうことでしょうか。長年にわたる苦勞がむくわれたのですから。そのとき眼下の船を見、その船が建造されていった過程を思いおこし、それぞれ、自分の造った部分に目をやるでしょう。長い年月を振り返り、「私が造ったんだ」と満足げに言うことができるのです。

事のおかげで自分の弱さを経験するのはたしかですが、同時に、自分のもつ創造力をも知ることができるといふことです。みなさんも毎日のように、こう感じていらっしゃるでしょう。どうか、その力を忘れないでください。なるほど初めは物と戦わなければなりません。しかも、なかなか思い通りになってくれません。しかし、何年かの苦勞のあと、進水する船を目のあたりにして、満足感を味わうことでしょうか。長年にわたる苦勞がむくわれたのですから。そのとき眼下の船を見、その船が建造されていった過程を思いおこし、それぞれ、自分の造った部分に目をやるでしょう。長い年月を振り返り、「私が造ったんだ」と満足げに言うことができるのです。

ところで、勤勉さについてはここで終わりと、話を打ち切るわけにはいきません。仕事は自己啓発の手段であり、仕事によって家族を守ってゆくことができ、さらに、仕事は道徳生活の源であるのなら、仕事というものと神との結びつきを無視することはできません。神との結びつきを無視することはできません。宗教心と無関係の勤勉さなどありえるのでしょうか。宗教心と勤勉さとは相対立する関係にあるのでしょうか。いいえ、決してそうであってはならないのです。

道徳生活の源泉

創世主である神が人をお造りになったのは、創世の書に書かれてあるように、世界の始めから、土地を耕させ、豊かな実りをもたらさせるためでした。(2・5、15と3・23参照)そして人に、地を支配させたのです。地上の支配権とは、同時に、霊の主権であり、王権の証明でもあります。人間が創造された世界の王になるのは、実に働くという活動を通してであり、神と神の摂理に対する否定、拒絶、反対は、たとえどのような内容であろうとゆるされません。仕事という世界を通じて私たちは神を崇拜し、み摂理に感謝しなければならぬのです。(一九八二・十一・二〇)

不変の教え

つねに信頼できる情報を!

第二バチカン公会議の一文書にみなさんの注意をひきたいと思えます。これまでは、正しく理解され、適切に運用されてきたとは言えない文書、つまり、広報機関に関する教令のことです。同教令の第五項は情報論の要約ともいべきもので、報道の概念を明らかにすると共に広報機関に従事する者の倫理規範を定めています。

教令によると、報道とは情報の探知およびそれをニュース形式で迅速に公表することである、と定義されています。情報を獲得する権利は今日の人間社会に固有のものであり、このような権利が生まれる遠い原因となったのは、現代社会の進歩とそれにもなう相互依存関係の増加である、というわけです。さらに、報道の権利はつまるところ、出来事について充分な知識を継続して提供することによって、人々が公共の利益に効果的に貢献し、社会により一層の進歩をもたらすことができるためなのです。教令は最後に、情報の知らせ方について指示を与えています。内容に関しては、常に正確であるように、とくに正義と愛にもとらぬ範囲内で、完全を期すべきこと。報道の方法に関しては、公正・正確、さらに、道徳規範と人間の正当な権利と尊敬をことごとく守るべきこと。しかも、これらは情報を求めるときも、公表するときにも留意すべきであること。

人と社会への奉仕

報道関係者が担う特別の使命には、公会議のテキストも説明しているように様々な側面があります。それを一言で要約すれば、「奉仕」ということになるでしょう。つまり、人びとと社会への奉仕です。教令によれば、人と社会こそまず第一に、情報獲得の権利をも

つからずです。必要な知識を得、出来事のできる限り客観的にとらえた上で、人々が、一時的であれ永久的であれ、とにかく自由に選択することができる状態、このような状態を確保することが報道関係者の仕事なのです。自由な選択ができて初めて共益と社会の本来の意味の進歩に役立つことができるからです。このような目的を遂行するみなさんは一つの勢力となるわけで、「第四身分」(言論界をこう呼ぶ)と呼ばれるいわれもここにるのであります。報道伝達の手段が新聞からラジオやテレビへと広がるにつれて「第四身分」は急速に成長してきました。エレクトロニクスの進歩につれて、情報収集力が増大した結果、放送の間「ニュース・ブランク」つまり、瞬時に全世界のすみずみまで同じニュースを伝えることができるようになりました。

こうなると倫理・道徳の問題が公正な報道者としてのみなさんの良心にかかわってきます。

道徳の問題が公正な報道者としてのみなさんの良心にかかわってきます。言いかえれば、どのようにすれば「第四身分」たる勢力を奉仕の使命に結びつけることができるか、しかもその使命に反することも、使命の枠から外れることもなく勢力を使うにはどうすればよいのか、ということなのです。

例えば、自由に情報源に近づき、自由に意見を述べ表現し、読者や視聴者に自由に情報を提供する権利は、いかなる外圧からも守らなければなりません。

それだけでなく、みなさん方も、というよりとりわけみなさん方の場合には、みずからの精神の自由を守る権利があり、またその義務もあります。精神の自由を守らなければ、利己的・個人的な利益や経済的・思想的な圧力だけでなく、スキャンダラスな記事をさけることも、といていできなくなってしまうでしょう。

報道の倫理

以上述べた目的を達するために必要なこと、それは報道の倫理を確立することです。国内、国際間の憲章で定められていなくても、この倫理はみなさんの良心に刻まれていきます。従って、報道関係者は例外なく、力行使して聴衆をこまかし、営利のために利用するような誘惑を本能的にさけることでしょう。誘惑にまければ、信頼できる報道者であることはできなくなってしまうからです。

それだけではありません。「勢力」が人々への奉仕を目指したものであるなら、人々への人間のキリスト教的な面を充分に育てることのできるよう、積極的な努力を払って、聴衆を教育し、敏感にする必要があります。だからといって、人間生活の啓蒙的な面だけをお

愛するみなさん

ざと取りあげて、それだけを伝えるというのでないのほもちろんです。残念ながら、悪は存在します。また、悪と接して生活している人に周囲で起る悪について知らせないでいたところで悪を取り除くことはできません。報道関係の仕事のほかに、独断的な教義は言うまでもなく、説教や非難といったものが待ちうけています。この世界とそこで起る出来事をしっかりと経験し、見きわめること、また、理想的価値基準を自分でもち、その基準に照らして、社会および社会のでき事を判断すること、こういう仕事はどちらかと言え

ばみなさん方の仕事です。ここで申しあげた価値の基準とは、万人のための基準であるべきであって、それこそ、人間が「人間」としての尊さ、品位を保ちうるものでなければなりません。信仰のある人、あるいは少なくとも信仰に真摯な敬意をもつ人にとっては、キリストの福音こそ、その価値なのです。キ

ストの福音のおかげで、私たちの長子キリストの兄弟としての尊さと品位を保つことができるからです。

このような価値を尊重していただければ、報道にあたって、みなさん方はつねに、善は善、悪は悪であると主張する努力をなさることでしょう。善は正義であり愛です。悪とはすべて暴力、憎しみ、利己主義のことです。たとえ貧しさのうちに実践されたとしても、善は高潔であり徳です。逆に悪は、富とせいたくで満たされていたとしても、不道徳であり悪徳であることには変わりありません。この過ぎゆく世界の現実には単に相対的なものにすぎず、絶対的なものは天国の永遠なる善だけです。それに向かって私たちは進んで行かなければならないのです。(一九八二・五・二十三)

祈りを与えるのは神

祈りと召命。教会は、人類の救いのための神の賜物です。それで、教会に全き奉仕をする召命もまた神の特別な賜物です。この理由で、私たちは、この賜物を神のみに願ひ求めます。なぜならば、神のみがそれを与えることがおできになるからです。私たちは、世界に開かれた心をもって、全人類の幸福を願ひながら、この賜物を祈り求めます。主イエズスが召命のために祈るよう言われたのは、そのあわれみ深い心が世の中の苦しみを見られたからであったということを記憶してください。

イエズスは「多くの人びとが牧者のない羊の群れのように虐待され、倒れているのを見て、哀れに思い、弟子たちに仰せになった、『刈り入れは多いが、働く人は少ない。だから、刈り入れのために働く人をおくってください。』(マテオ9・36)『38』(『召命祈願のため』の教皇様のメッセージ参照)

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部六十円送料六十円 一年予約七百二十円送料七百二十円 二十部以上の一括購入なら送料不要 郵便振替 神戸 3-72393